

# 県中教研 国語部会だより

第 35 号

発行日 令和2年3月  
発行所 富山市千歳町1-5-1  
富山県中学校教育研究会  
編集責任者 高林 正行  
題 字 金山 泰仁 先生

## 育成する資質・能力に適した言語活動を

主任指導主事 大村 吉永

今年度、多くの国語科の授業を参観させていただいた。研究主題「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動を通して、国語の能力を高めていくための指導はどうあればよいか。一言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり」の下、目指す資質・能力を確実に育成するための言語活動を真摯に考える先生方から多くのことを学んだ。「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、確実に進んでいると実感したところである。

心に残った実践を紹介したい。ある市の2年生の授業である。その授業では、「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」で学んだことを、1年生に効果的に伝えるプレゼンテーションにしようと、相手意識や目的意識を明確にした言語活動が設定されていた。生徒は、一人一台のタブレット端末を活用し、どのようにしたら自分が体験したことを1年生に分かりやすく伝えられるか、構成を試行錯誤したり、説明に用いる言葉を吟味したりしながら、よりよいプレゼンテーションを目指して学習活動を進めていた。本授業で身に付けさせたい指導事項は、「話すこと・聞くこと」の「根拠の適切さや論理の展開等に注意して、話の構成を工夫することができること」である。身に付けさせたい力を単元や授業の中で明確にしながら、様々な手立てを講じていた授業者の工夫が参考になった。

国語科における「主体的・対話的で深い学び」の授業改善の視点は、育成を目指す資質・能力に適した言語活動を考え、その質を向上させることに他ならない。国語科は、言葉そのものを扱う教科、言語能力を育成する教科であることを改めて確認したい。生徒が言葉に着目し、言葉に対して自覚的になるような言語活動を考え、単元を構想していくことが、私たち国語教師の課題である。

(西部教育事務所)

## 主体的な姿勢

部長 高林 正行

昨年度に引き続き、「言葉に対して自覚的に思考・判断・表現する言語活動」「言葉についての課題解決を主体的・対話的に行う授業づくり」に焦点を当てて研究を進めてきました。

第63回研究大会で私が参加した富山・高岡両地区の研究授業は、共に「話す・聞く」活動に関するもので、小グループごとにタブレットPCを活用して話し合いを進めていました。手際よくICTを使いこなす生徒の様子を目にして、少し前までは特別な取組と思えたことがもはや普通のものになりつつあることを感じました。授業者の先生が主体的に授業の切り口を考え、挑む姿勢が参加者の大きな刺激になったように思います。

今回、授業力向上アドバイザーをお招きする両地区の研究授業が、共に「話す・聞く」分野の授業だったことに、講師の米田先生が配慮くださり、ご講演は「きく」に焦点を当てた内容でした。

私たちが授業で扱う内容は、「読む」「書く」活動が多くなりがちです。しかし、日常生活で行う言語活動は、圧倒的に「話す・聞く」に関することが多いです。そして誰かと対話する際には、自分が話している場面以外は、「聞く」活動をしているはずで、ですから「聞く」ことについて、私たちはもっと考え、学ぶ必要があります。米田先生は、お話の中で「能動的にきく」「主体的にきく」ことの重要性を強調されました。今まで最も受け身な活動と考えていた「聞く」ことに主体的・能動的な姿勢が求められることをお聞きし、新鮮な学びとなりました。元気に発言する生徒だけでなく、深く考えながら静かに耳を傾ける生徒に、もっと目を向けなければいけないと感じました。

来年度も、これまでの積み重ねを生かし、部員一人一人の主体的な姿勢と協力で、さらに研修が深まることを期待しています。

(富・呉羽中)

# 第 63 回 研究

新 川 地 区

(滑・早月中)

## (1) 研究授業

老田千成実教諭が「いにしへの心と語らう」の単元で「表現技法を用いて和歌を詠む」という授業（3学年）を行った。本時のねらいは、独特の表現技法をもつ和歌を創作する活動を通して、古典に関する興味を深め、親しむ態度を育むというものであった。初めに、和歌の表現技法として枕詞、掛詞、縁語、折句、本歌取り、物名等を確認した。

続いて、それらの表現技法を用いて生徒一人一人が和歌を創作した後、班になって互いに作品を



発表し、推敲した。終わりに、班の代表者が学級全体に発表し、工夫した点や優れた点を共有した。生徒たちは2年時に外部から招いた歌人の講座を受け、短歌を詠んだことがある。そうした経験を生かし、本時においても国語辞典や便覧を活用したり、班員と積極的に話し合ったりするなど、主体的に学び、そして相互に学び合う姿が見られた。

## (2) 研究発表

松原剛志教諭（雄山中）が「語感を磨き、自覚的に思考・判断・表現する言語活動」の授業実践例を発表した。平成30年4月に実施された中教研学力調査の反省点から、各学年の「言葉」の単元を取り上げ、系統立てた言語活動を仕組むことの大切さが示された。また、舟橋村で行われている「段階的言語活動スキル」という教科横断型の授業の活動例も紹介された。

## (3) 研究協議（指導助言）

能瀬明指導主事（東部教育事務所）から、「子供が『学びたい、やってみたい』と感じる課題設定の大切さ」、「『話すこと』と『聴くこと』の双方を意識して対話することの重要性」「中学校3年間の学習に見通しをもち、系統的に実践を整理することの重要性」について指導助言をいただき、充実した協議が行われた。

佐賀 富春（滑・滑川中）

富 山 地 区

(富・興南中)

## (1) 研究授業

興南中学校では、「話題や方向を捉えて話し合おう」（1学年）の単元で、タブレットパソコンを活用した授業を高見



駿佑教諭が提案した。話し合いの中で効果的であった発言や言葉はどのようなものかを振り返るため、繰り返し視聴できるタブレットパソコンを活用した。そうすることで、話し合い活動の中で、生徒は主体的に追究する様子が見られた。「話すこと・聞くこと」の領域にICTを活用する授業は今後の可能性を感じさせるものだった。

## (2) 研究発表

江尻小春教諭（呉羽中）が、書写に対話的な学習を取り入れた授業事例を発表した。一人一画ずつ書く「文字リレー」をすることにより、一画一画を丁寧に書き進める作業をグループで行うことやグループで意見を交流することで、始筆・終筆・字形等、一画一画の大切さや丁寧さを自覚することができた。そして、それを個人の取組にフィードバックするという取組の実践事例であった。

## (3) 研究協議（指導助言）

指導助言者の上島芳子主任指導主事（東部教育事務所）からは、生徒に付けさせたい力を明確にし、ゴールをはっきりさせて指導すること、また、ねらいを焦点化することにより、より深い学びになることを中心に、指導助言をいただいた。

## (4) 授業力向上のための講義

「聞くことの指導をどうするかー対話的な学びの実践に必要なこと」と題し、富山大学名誉教授、奈良教育大学特任准教授の米田 猛先生にご講演いただいた。「耳の働き」はリアクションとしての表現であり「能動的思考」につながることで、相手の言葉をゆっくり理解し意図や立場を思って発言するべきであること、「聞くこと」の意義を理解して授業を行うことが大切であること等を教えていただいた。

松下 良策（富・西部中）

# 大会を終えて

高岡地区

(氷・北部中)

## (1) 研究授業

江尻史世教諭による「資料を効果的に使って、印象に残る提案をしよう」(2学年)の授業では、1年生に向けた「社会に学ぶ『14歳の挑戦』」のプレゼンテーション資料をよりよいものに改善するという活動を行った。導入で、代表者のプレゼンテーションを提示し、よい点や改善点を挙げることで、話合いの視点を全体で確認した。生徒たちは、一人一台のタブレット型パソコンを使って、4人一組の小グループでプレゼンテーションを行った。さらにそれぞれの資料について、ワークシートの観点に沿って気付いた点を伝え合った。後半では、話合いを生かして、各自の資料の修正を行った。

## (2) 部会協議

部会協議①は、グループ協議での形式で行った。グループは予め指定されており、視点を



を明確にした協議が充実するよう配慮がなされたものであった。協議では、生徒が積極的な意見交換を行っていたことや、話合いの仕方が身に付いていて、活発な意見交換がなされたこと等が挙げられた。一方で、一人一台のタブレット型パソコンの効果的な使い方やアドバイスする項目の数等、今後の指導上の課題についても協議がなされた。部会協議②では、米田猛先生から「『聞くこと』の指導をどうするかー『対話的な学び』の実現に必要なことー」と題し、ご講義をいただいた。

## (3) 指導助言

指導助言者の大村吉永主任指導主事(西部教育事務所)からは、生徒の実態を把握し、聞き手を意識した単元構想の工夫や、本時の充実した手立てについて、また、メタ認知の視点を踏まえ、振り返りの大切さについて、ご指導いただいた。

八下田健輔(射・小杉中)

砺波地区

(南・吉江中)

## (1) 研究授業

下村知絵教諭が「三角ロジック」を用いて論理の展開の仕方を理解するという授業(2学年)を行った。「モアイは語るー地球の未来ー」を教材に、「イースター島の文明が破壊した事実は、私たちにどのような警告をしているのだろうか。」という課題を設定し、ワークシートを活用して授業が進められた。



ワークシートは、視覚的に「主張」「根拠(事実)」「理由付け」の関係が捉えられるものとなっており、生徒の理解を深める手立てとなった。班活動では、「三角ロジック」で読み取ったことを基に意欲的に話し合う姿がみられた。

## (2) 研究協議(指導助言)

研究協議では、「三角ロジック」の授業での効果的な活用法等について考察を深めた。

指導助言者の砂土居良江主任指導主事(西部教育事務所)からは、「三角ロジック」を通して生徒に「主張」を支える「根拠」、「理由付け」の重要性に気付かせることが大切であることをご指導いただいた。

## (3) 研究発表

泉千英教諭(蟹谷中学校)の「生物が記録する科学ーバイオロギングの可能性」、津田昌明教諭(福野中学校)の「高瀬舟」を題材にして実践した研究授業の報告があり、意見交換を行った。モデルを用いて動作化したり、思考の流れを示したワークシートを用いたりすることによって、生徒の理解を促し、話合いを深められることが解明された。課題として、言葉による解釈をさらに深めることが挙げられた。今後、なぜそのような表現をしたのか、書き手の意図を考えさせるという実践につなげていきたい。

埜村真由美(砺・出町中)

# 授業力向上のためのアドバイザーによる講義 「聞くこと」の指導をどうするかー「対話的な学び」の実現に必要なことー

富山大学名誉教授・奈良教育大学特任准教授 米田 猛

## 1 認め、協力して「対話」が成立



「主体的・対話的で深い学び」の「対話的」をどう捉えるか。大事なことは、異なる意見をもっている、互い

に向かい合うこと、互いの人格を認め合うことである。

擦り合わせることによって、互いに高め合えるのが「対話」である。相手を認めるといった人間関係がなくては対話は成立しない。相手を認め、協力する関係があつてこそ、相互交流が実現する。

## 2 言語活動の奥に潜む頭と心の動き

「きく」には、相手の言葉を全体として受け入れる「聞く」、焦点を絞って理解する「聴く」、そして、分からないところを問い返し、もっとよく知ろうとする「訊く」があると村松賢一は言う。「きくこと」は本来能動的な行為である。「ask」（問う、尋ねる）という言語活動はその具現化を図るが、言語活動そのものが「能動的にきく」という本質ではない。言語活動の奥にある頭と心の動きをこそ問題にすべきだ。活発に質問し、話し合うことが頭と心を鍛えるとは限らない。

## 3 創造と発見を生み出すきき方を

古田拓は「理解」「批判」「問題発見」という段階を経ることを提言する。相手の発言を認め、相手の立場を寛容的に受け止め、相手と対話することで、自分の立場が鮮明になる。そして、自分の問題発見をする。「能動的にきく」とは、自分の中に何かを創造するきき方のことをいう。問題意識をもたせ、創造や発見を生むための、きく前の指導が必要である。

## 4 沈黙の教育的価値

話し方の指導が重視される一方で、黙ってきく指導は軽視されてきた。倉澤栄吉は「沈黙であることは比較的易しい。が沈黙することは必ずしも容易ではない」と述べる。話し始める前に、聞き、受け止め、相手の立場や意図を察する。きき手は自分の思い違いに気付くこともある。「聞こうとして沈黙するには、聞くことがはっきりしていなければならない」と提言する。沈黙することは考えること。考えようとする間が要る。その間は沈黙である。「質のよい沈黙」を教室で実現することが「思考力の錬磨」に結び付く。倉澤は「自己確立」「自己発見」「自己変革」を可能とする



時点で「沈黙の教育的価値」を位置付けた。きくことと沈黙することとは一体なのである。

## 5 主体的な「きき手」を育てる指導を

「ききたいこと」「きく必要のあること」をもっているかが、きき手の主体性を保障する。学習者の湧き出す思いを引き出し、相談しないと解決できない場面をつくるのが教師の役割である。古田の三段階に即していうと、「理解」という段階は、相手の「目的」「立場」「隠された意図」等を尊重しながら「受け入れる」ことである。「能動的なきき手」はこうして育つ。

(氷・南部中 三國 大輔)